

明神川にかかわる生活の今昔

勝矢 淳雄

一 はじめに

明神川について研究をはじめたきっかけは、昭和四四年にさかのぼります。大学への交通がこの頃は上賀茂神社前を中継点にしていました。そのときに近くを流れる明神川を見て、この川はおかしいと思ったことからです。何故おかしいと感じたかといいますと、地形の起伏を考えると流れが逆になるということです。明神川の流れは西から東に流れています。神社を南に出たところにある内川橋の東に、山から続く低い尾根筋がほぼ北から南に走っています。ところが明神川は、その尾根の起伏を越えて東に流れているわけです。こ

の明神川について研究したいと思ったのですが、当時は別の研究をしておりましたから、そのまま三〇年近くがたつてしまいました。ようやく、数年前から地域の研究に取り組みたいと思い、明神川について調べました。

二 明神川について

京都の北部は、河川と山で囲まれた三角形の形をした地域です。東西を高野川と賀茂川に囲まれ、これらの両河川は出町で合流します。北は山で遮られています。この地域の北西部が上賀茂地域であり、その南、すなわち三角形のほぼ西半分が上

賀茂神社の社領として上賀茂を支えた農地です。

この地域は賀茂本郷と呼ばれていますが、この地域を明神川は枝分かれして縦横に流れ、農業用水路としての役割を果たしています。この三角形の地域は、地形的には慢性的な水不足の所なのですが、西半分は明神川があるので、比較的深刻な水不足は少なくすんでいました。東半分の地域は、高野川からの分水について他の地域とよく水争いがありました。江戸時代には奉行所に訴えた記録も残されています。以上のことから分かるように、じつは明神川は人工的に造られた川でした。この明神川がいつ頃開削されたかということですが、古い資料にも明神川について記述されたものを見あたりません。神社の祭祀は大切な行事ですから古い資料もありますが、明神川の開削は生活の基盤をつくるための大切な事業でありましたが、生活のための事であり、神に関わる行事でなかったからかも知れません。

そこで推測ということになりますが、賀茂の歴史を調べていきますと、賀茂族が上賀茂に移り住んだときに、現在の明神川の原形を開削したと考えられます。すなわち、一二〇〇年前の平安遷都以前に上賀茂神社は存在しており、当然賀茂族はこの地域の支配権を確立していたわけですが、この明神川を開削することによって、賀茂族はこの地域の支配権を確立したと私は考えています。上賀茂には、大田神社の氏子である先住民が居住していたと言われています。その後賀茂族が来ます。賀茂族が上賀茂にきて、先住民をおさえて、ここを支配することができるようになったのは、明神川を開削することによって、地形的には慢性的な水不足になる賀茂本郷地区に農耕用水を安定して供給できるようにしたからではないかと考えています。上賀茂神社は、雷、すなわち水を司る神を祀っています。いわゆる農耕神ですが、単に一般的な意味で水を司る神というだけでは

なく、具体的な対象としての明神川を守る神としての意義があつたのだと考えています（参考文献）。

三 明神川の水源と周辺の様子

明神川の水源は賀茂川です。賀茂族が開削した当時からそうであつたと考えられますが、当時は現在よりずっと下流の上賀茂神社境内の北隅あたりに取り入れ口があつたのではないかと考えられます。現在の鞍馬街道のあるあたりです。当然昔は現在の堤防はありませんし、神社周辺の地域は平野から山にかかるところの地形が急激に変化していることから、現在の神社境内も古くは賀茂川の河川敷であつたといえます。このため適当な取り入れ口として上述のようなところ周辺に水の取り入れ口があつたと考えられます。なお、現在の鞍馬街道より北は、柘野と呼ばれています。が、この地域には古くから橋本姓を名乗る一族が

住んでおられます。上賀茂神社の北を守るために、古くからこの地に住んでいたと言われています。上賀茂神社境内にある末社の一つに橋本社がありますが、これは橋本一族のための神社とも言われています。上賀茂神社の北を守るといふこともあつたとは思いますが、より具体的には、明神川の取り入れ口を守っていたのではないかと考えています。

賀茂川からの現在の取り入れ口は、堤防の建設などがあつたので、神社境内北端から九〇〇メートル足らず上流にある明神井堰です。明神川による浸水を防ぐために、数年前に井堰の調節が自動で制御されるようになりました。それまでは、雨が強く降りだすと、井堰の管理をしている方が大急ぎで駆けつけ井堰を閉めていました。これは、神社下流の沈殿井堰でも同様で、井堰の管理をしている方は大変でした。少し雨が多く降ると浸水を起こすことから、明神川が自然の川でないこ

とを理解してもらえらると思ひます。

明神川の主流はこの賀茂川からの流れですが、それ以外に現在はゴルフ場の中になつてゐる蟻ガ池と小池からの流れがあります。蟻ガ池は自然の池ですが、小池は農業用水のために尾根筋の間の流れを堰き止めて造られた池です。一六〇〇年代に既にあつたそうです。現在のゴルフ場は戦後に進駐軍によつて造られたもので、上賀茂神社の神領で、それまでは森でした。蟻ガ池は、森の中の池で大雨の時には鞍馬街道のあたりまで池が広がつたそうです。今でも、鞍馬街道沿いに当時の片鱗の小さな池が残つております。蟻ガ池は、ゴルフ場の拡張で一時はその姿をほとんど消してしまいましたが、歴史的にも大切な池であることから、浚渫されなるとかその姿をとどめていますが、昔の面影はありません。この蟻ガ池には、上流の柘野地域からの農業用水路が二つ流入しています。水量的には、あまり多くはないのです

が、この蟻ガ池からの流れは水質的によくなり、下流となる明神川の汚濁の大きな原因の一つになつてゐます。

小池は山からの流れをせき止めた池で、戦前は鯉の養殖もおこなつていましたので、今も鯉がたくさんいます。また、小池は戦前から引き続き、現在も日本泳法の講習がおこなわれています。今は、ご子息の方が引き継いでおられますが、上賀茂では、お父さんに二代続いて水泳を習つたという方もたくさんおられます。小学校にプールがなかつた時代、あるいは今ほど受験塾が盛んでなかつた頃は、多くの児童などがここで水泳を習つたのですが、今はだんだんと少なくなつてきています。なんとか、日本の伝統の泳法を継承していきたいものです。農業用水の溜池としての役割は、賀茂本郷地域の区画整理事業によつて、農地が減少したことによつて現在ではありません。それゆゑ、明神川の水源としても多くの部分は占めてい

ません。

賀茂川の明神井堰から取水された流れは、上賀茂神社本殿のそばでは御手洗川と呼ばれます。上賀茂神社には、かつては御手洗舎はありませんでした。この川を使っていたわけです。一方、蟻方池と小池の流れは合流し、本殿の前を御物忌川として流れます。水を本殿の周囲に取り入れて景色にしている神社は珍しいと言われていますが、単に景色と言うのではなく、農業用水を守ると言う実際の意味もあつたためと考えています。これら二つの流れは本殿下流で合流し、橋殿をくぐる。と今度は榎の小川と呼ばれます。榎の小川では、葵祭りの禊の儀式や六月晦日には夏越の祓がおこなわれます。榎の小川は境内を流れると、明神川と呼ばれます。この明神川の川沿いには室町時代から神官の住居がつくられるようになり、いわゆる社家町が形づくられます。この社家町も昭和四〇年頃からの開発ブームの影響で、次々と社

家が取り潰され新しい家が建てられたりするようになりました。気が付いたときには、社家町があるのは全国的にも珍しいものとなっており、昭和六三年に国の重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）に選定され、地元でも保存に力をいれるようになりました。

ここで取上げている明神川は、この社家町を流れている部分を中心にし、藤木社までの二五〇メートル位の間です。伝建地区の周辺は、市の界限景観保存地区に指定されています。この地域での生活を調べたのは、以上のような指定がありますから、古くからの状況が比較的によく残っているということと、今後も長くこの状況が続く可能性が高いということにもありました。ただ、調査を始めたとき、地元の方に言われましたのは始めるのが数年遅かったということです。ここ数年に地域のことをよく知っている、また積極的に地域のことをしておられた方が次々となくなつて

おられました。しかし、今からでも始めておきませんと、ますます分からなくなります。既に四五〇年前のこともそろそろ分からなくなっています。学生と話をしていますと三〇〜四〇年前のことを知りません。古いことだけではなく、私の子供の頃の事を知りません。学生の親の年齢が私より若くなってきましたから当然とも言えますが、最近の生活の変化がいかに大きいか分かりません。最初は、明治の頃まで遡りたいと思っただのですがとうてい無理です。昭和のはじめ頃が限度のようです。幸い、ここはお年寄りの方が健在で、九十歳以上の方も結構おられます。この地域は、伝建地区などで現在には保存の方向にありますから、うまくいけば地域の雰囲気は一〇〇年後も今のような状況が続いているかもしれません。

我々の日常生活も、今は当たり前ですが、時代がたてばやはり記録にしておかなければならない大切なこととなります。昔は日記を書きましたが、

今は日記を書かなくなってきましたので、ますますわからなくなると思えます。一〇〇年後には現在の生活もきつとわからなくなっていると思いますので、そうすれば、今から始めた調査もその頃には価値のあるものになっているのではと期待して進めています。

四 上賀茂の社家町

社家町は現在では全国的にも珍しいものになりましたが、この神社でも神官の住居である社家あるいは社家町がありました。近くでは、下鴨神社にも社家町がありました。昭和三年から工事が始まった下鴨本通りを造るときに殆んど潰してしまつたのです。今では、一部の社家だけが残っています。上賀茂でも、社家町をさほど大切なものとは考えていませんでした。京都市の都市計画では、今でも明神川は道路の計画範囲に入っていますし、社家の多くは道路の拡張範囲に入って

います。実際、明神川を暗渠にして道路を拡張しようという計画が動き出したこともありましたが、明神川沿いの藤ノ木通りの交通量が多いことと、この道が小学校へ通う唯一の通学路であることにより、当時の自動車優先の社会の風潮、明神川は水質汚濁によって邪魔者扱いされていたことなどにも原因があります。農業水路としての維持の面から水利組合が反対して取り止めになりましたが、今のように社家町という観点からはなかったのです。すなわち、当時は景観を含め社家町の価値はほとんど認識されていなかったことがわかります。もし、明神川が暗渠化されて、上が道路になっていましたら、明神川沿いの社家の特徴の一つである遣水も維持できなくなっていたでしょう。暗渠からでは、水を遣水に流すと言ふことは困難です。社家と言つても個人の住宅のことですし、遣水はその庭園の景色と言われておりますが、古くは室町時代から続いた歴史遺産

ともいえます。しかし、その価値を当時は認めていなかったわけです。遣水というのは、川から水を引き入れて庭園に水の流れをつくり、再び川に水を戻す構造になっている水の流れを言います。遣水のことにはもう少し調べたいと思っていますが、既にヘドロや水が入らなくなったことから二・三の社家では潰してしまつたようです。明神川沿いの社家だけが遣水構造になっており、その他の社家では普通の池構造になっています。遣水構造が単に庭園の景観を形づくるというだけでなく、何らかの別の目的があつたのではないかと考えています。

明神川ですが、勿論、現在は周辺も含めて伝建地区などに指定されていますから、明神川の上を道路にするという都市計画が実施されることはないでしょう。ただ、我々が身近なところにあるものをこれは大切なものだと思つかなければ、次々と失われていきます。お土居の破壊などは大

きく失われた例です。後で気が付いたときには、手遅れになってしまいます。直接役に立つものでなくても、これはどうなのだろうと考えていかなければなりません。地元あるいは身近にいる人が一番良く知っているかといえ、必ずしもそうとは言えません。他所の人に指摘されて初めてこれはそんなに価値があるものかと気付くことも少なくありません。写楽を例に出すまでもないと思います。上賀茂の社家町は危ういところで救われました。目立った改築があり、景観が大きく崩れたことが逆に幸いして、社家町の価値が認識され保存という動きが起こったことによります。

明神川は伝建地区なので、社家の建物や土塀、門などの修理には国や市から補助が出ますが、一方、明神川の道路側はコンクリートがべたつと張ってあります。今年行った道路側の石積み補修も、コンクリートで不細工なものになっています。道路としての役割が果たせたらよいということ

だと思えます。そこには景観の保全という考えは無いといえます。役所の縄張りあるいは縦割り行政の結果です。水道管、ガス管が川の上に露出していて見苦しいなど、総合的な観点からの地域の景観保全というところまではいっていません。しかし、明神川沿いに電柱があったのですが、これは北側に移されました。ちぐはぐなところが結構目立ちますが、地元の意見も必ずしも同じではありませんし、少しずつ良くなればとみています。藤木社の樹齢五〇〇年といわれる神木も、交通のために切られるのが今の時代です。

五 明神川と生活

この社家町を流れる明神川ですが、明神川は暮らしとどのような繋がりを持っていたか、どのように生活に関連して使われていたかということ。賀茂族が明神川を開削した頃まで戻らなくても、明神川が農耕用水だけでなく、生活用水と

して使われていたことは間違いないと思います
が、現在聞き取り調査で遡れる昭和の初め頃では、
飲料ということでは既に使われていなかったよ
うです。戦前（昭和二〇年以前）から戦後にか
けては、私ぐらゐの年の方はお分りになるよ
うに、洗濯に使われてきています。昭和の三〇年位
までは日常のこととして使われていたよう
です。その頃は、明神川に杭を打って板を渡した洗
い場もあつたそうです。今は逆に伝建地区とい
うことで、こんな洗い場などは考えられませ
ん。現在でも、農業での泥のついた長靴など
は伝建地区以外の明神川では洗いますが、普
段の衣類をあらうのは違つたわけではあり
ません。食器類も洗つていたようで、合成洗
剤のなかった時代では、油のついた鍋など
を明神川につけておくこと自然にきれいにな
つたといふことです。これを家に持つてかえ
て、井戸水で洗いなおしてました。食器類
を洗つていたのはいつ頃までなのかはは
つきりしません。戦前

のことだったかも知れません。スイカなどを冷
やすのも、井戸より便利だったので明神川
が使われていました。明神川でシジミをと
つてきて味噌汁の具にしたそうですが、こ
れは戦後も相当続いていたようです。

飲み水としては、井戸を使つていたよう
です。この辺りは、山からの地下水の流
れがあります。井戸はさほど苦労しな
くても水脈を掘り当てられたよう
ですが、現在残つている井戸は深さが
一〇数メートルありますから、掘るこ
と自体はさほど簡単ではなかつたか
もしれません。この深さですと、井戸
水をつるべで汲み上げるのかなか大
変ですから飲み水以外では明神川を
使うということもあつたわけではあり
ません。社家町はいわば御屋敷町
です。殆どの社家に井戸があつたよ
うで、二つ、三つとある社家も珍しく
ありません。しかし、井戸のないところ
もあつたようで、井戸を使わせてあげ
ていたといふ話もあり

ますが、昔からのことであつたのかどうかはわかりません。

一方、吸い込み井戸というのもあります。排水を地面に吸い込ませる井戸です。社家町に西村家（旧錦部家）庭園があります。神主であつた藤木重保が一二世紀に造つたもので、当時の形をよく残していると言われています。この庭園には、明神川から引き入れた遣水の流れがあり、曲水川といます。曲水の宴を催したので、このように名づけられました。曲水川の側に吸い込み井戸があり、曲水川から汲んだ水で水垢離をした後、自然に水が地面に吸い込まれるようになっていきます。一度使つた水で曲水川の流れ、すなわち遣水の流れとして再び戻る明神川の流れを汚さないようにしたものです。このように、一度使つた水で明神川を汚さないように、吸い込み井戸が造られていたと言われます。台所などからの排水も、このように地面に吸い込ませていたと言います。上賀

茂神社の聖なる川を汚さないようにしていたと言われますが、私は少し違うのではないかと思ひます。明神川は神社の下流ですから、神社を流れる聖なる川としての役割は既に済んでいるわけです。むしろ、生活用水を汚さないようにという意味が大きかつたのではないかと思ひます。当時は、明神川の水を飲料用に使つていたからではないかと考えています。下流にある農家などまで全てが井戸を持つていたとは考え難いからです。そうすると、当時は明神川で洗濯をしたり、食器類を洗うなどとてもないことだったのでないでしょうか。都名所図会の高瀬川の光景を見ますと、高瀬川で女性が洗濯をしている様子が描かれています。江戸時代では、川で洗濯するのがごく自然だつたことがわかります。それでは、明神川ではいつ頃から洗濯などが行なわれたのか、現在ではわかりません。しかし、地域での明神川の位置づけは明らかに変化しだしていったことが

わかります。

江戸中期に建てられた社家などを調べますと、樋からの雨を地面に吸い込ませているところがあります。昭和一〇数年代に建てられた家でも大きな家ではこのような工夫がなされています。ですから、これも明神川を汚さないための工夫であったのか、一般的な雨水処理の方法であったのかは分かりません。

昭和になつてから、上賀茂周辺で水に関しての大きな事件は、昭和九年の室戸台風、昭和一〇年の大雨です。賀茂川の堤防が決壊しています。現在の堤防は、この後に建設されたもので、当時の堤防は、もつと簡単なものが御菌橋のところまでしかありませんでした。昭和の初め頃の地図を見ると、御菌橋より上流は堤防らしきものはありません。室戸台風では、神社の南のところは浸水して、現在酒屋さんになっているところは、二階から船で出入りしたと言われています。三日から一

週間くらい水が引かなかつたそうです。その後、赤痢あるいは疫痢が大流行しています。浸水で汚染した井戸や明神川が原因になったのではないのでしょうか。この頃から、明神川が従来のように使われることは少なくなつたようです。また、この後水道が引かれたようです。水道があるのが当たり前と思われるかもしれませんが、神社の北の終野地域では、水道が引かれたのが昭和四二年と言うことで、びつくりしたこともあります。それまでどうしていたかという、当然井戸水を使っていたわけです。

この明神川付近の地域では、まだ井戸水も結構使われています。聞き取りに行きましたある社家でもこれは井戸水なのですよ、と言われて出していたことがあります。まだまだ使われているようですが、一〇数年前に公共下水道を整備したときに、水脈を切つてしまい枯れた井戸も諸所にあります。良く聞く話ですが、地下水脈を切ら

ない下水道整備の方法というのも考えなければいけないのではないだろうか。

昭和の四〇年の初め頃がまた一つの転機になると思います。昭和二〇年の敗戦を経て、昭和三〇年代に復興から新たな所得倍増計画が動き出し、その影響が種々の面で顕在化してきたのが昭和四〇年初め頃からだと思います。当時、賀茂川の水が真つ青になったり、真つ赤になったりしていました。その水にすぐき（上賀茂特産の漬物の一種）の樽をつけていました。というのは、一年間すぐきの樽を使いせんから、隙間があいて水が漏りますから、賀茂川の水につけて、木を膨らませて隙間をふさぐわけです。しかし、あんな色のついた水につけて大丈夫なのだろうか、うっかりすぐきを食べられないなど思っていましたのが、四〇年後半にはなくなりました。当然、賀茂川の水を引いている明神川も汚濁していたわけです。それが最近、再びすぐきの樽を賀茂川に

漬けることが一部の農家では行われるようになってきました。それだけ、賀茂川の水もきれいになってきました。しかし、この話を地元の人に話しましたら、実はあれについてはね、若い奥さん方から食べ物作るすぐきの樽をあんな汚い賀茂川に漬けてという批判もあるのですよということでした。賀茂川に限らず川について研究しただし一つ気になりますことは、我々の時代のものは、川は元々きれいだったのが汚くなり、それが再びきれいになってきたと考えるのですが、最近の若い人は、若い人というのは小さい子供さんがいるお母さんくらいの方ですが、川というものはもともと汚いものだ、その考えが基本にあって、その川がきれいになっている、という考え方をされるようです。根底に、川とは汚いものと言う考えがあるようです。この辺の考え方がだいぶ違うという気がします。それが、川に対する次の行動や考え方に違いが出てきてるように思います。川は汚

いから入ってはいけないという考え方になるようです。

昭和四〇年前後のこのような川の汚濁状況によって、明神川に限らず京都市全体に、あるいは全国的といった方がよいかもしれませんが、河川の美化保存あるいは清掃活動という流れが出てきます。ここ明神川も昭和四二年に明神川美化保存会が発足し、明神川をきれいにしようではないかということ、清掃活動が行われるようになりました。

六 明神川の清掃

現在、この社家町を流れる明神川の清掃活動を私は問題にしています。社家町を構成する大切な要素の一つは土堀ですし、またその土堀の基礎になっている石積みです。明神川の清掃活動によって、これが崩壊しだしていることです。清掃活動をはじめた昭和四二年頃としては、確かに今のよ

うなやり方で清掃することも必要だったかも知れません。しかし、今も同様の方法でやるのがいいのかについては疑問になるわけです。

明神川には藻がありません。半年位たつと結構藻が生えてきます。この藻が生えるということが正常なのか、そうでないのか良く分かりません。かつては底は砂利だったという人もいますし、藻は昔から生えていたという人もあります。賀茂川の上流で琵琶湖産の稚鮎の放流をやりだしてから藻が生え出したとも、かつては藻はあつたが種類が違ったとも言われます。

明神川に関しては、藻がないのが当たり前前の状況と地元は考えているようです。また、藻があるとゴミが引っ掛って汚いとも言われます。明神川の上流側の樋の小川のところですが、ここは藻がありません。それでも川底から掻きまわします。葵祭の時に川がきれいになると、農業用水路の整備をかねて五月一〇日に水利組合によって

清掃がおこなわれます。田植えの前になればどこ
の農業用水路でも行われていることです。色々破
損したところも直すわけです。ところで、私は学
生に見に行かせます。そうすると学生が言うには、
「あれは何をしているのですか。まったく必要な
いでしょう」というわけです。わざわざ、引つ掻
きまわす必要はないのではないかというわけだ
す。水の流れを阻害する状況ではないのですが、
水利組合としてここはどここの地区の割当と
なっていますから、地区としては何もしないわけ
には行かなくて川底から引つ掻きまわすわけだ
す。五月のこの頃に引つ掻きまわすものですから、
実は蛭も放したのですが、三年くらいで激減し、
ほぼ絶滅してしまいました。蛭が育つ頃に川底か
ら全て引つかきまわすものですから、激減するの
も当たり前なのです。こういうことの必要性もど
こまであるのか疑問に思っていますが、口出しす
るわけにはいきません。

明神川の清掃も同様に行われます。そして明神川
美化保存会の清掃は、七月と九月頃に行なわれま
す。この頃は場所によって川底に藻がいちめんに
生えています。川底はどうなっているのかとい
うことですが、砂利であったとか、土であったとか
言われます。要するに今は粘土質です。コンクリ
ートでないことは明らかです。こういう状況で藻
をあげますから、藻と一緒に川底の土もあげてし
まいます。土をあげてしまいますから、当然、川
底が低くなってしまう。川底が下がるから、
藻は根こそぎ取らないでもよいのでは、ここまで
しないでもよいのではと申しています。観光で歩
いている方も、「エッ、こんなに取ってしまうの
ですか」と見てびっくりしておられます。しかし、
長年の習慣として続けられてきたことは変更が
なかなか困難なようです。地域の生活あるいは地
域の社会があり、長年の方法を急に変えるわけに
はいかないようです。清掃も年一回でよいのでは

と申しています。これについては、地元でも私と同様の意見の人もあり、最近は何年一回にしました。どの程度川底が下がったかは明確には分かりませんが、一〇〇一五センチくらい下がったようです。

川底が下がることによつて何が起こっているかが問題です。たとえば、石積みを支えるための基礎の木ですが、これは当然土の下になければなりません。そうでなければ腐ってしまいます。この木が水中に露出しだしているわけです。清掃の方法の改善だけでなく、早く明神川は改修が必要だということもお話はしていますが、なかなかそれも進まないうちに、このような状況になってしまっています。当然石積みはゆるむわけで、仕方がないので、社家によつては隙間をコンクリートで埋めることになりました。石垣のためにも、景観からいっても決して望ましいものではありません。また一方で、賀茂川から水が流れてきますか

ら当然魚がくるわけですが、子供は竹さおで石積みとの隙間をほじくって魚取りをする。こういう状況にありますので、そうなると石積みはさらにゆるむので、子供達がここで魚取りをするのは嫌われるわけです。「そこで何しているの」と追われてしまうわけです。

水深としては一〇センチから一五センチくらいですから、子供の水遊びにはもつてこいの場所です。横の藤ノ木通りの交通量が多いのが欠点ですが、溺れることもありませんし、魚もいる、人の目もあるということ、絶対の遊び場なのですが、何時行っても子供が遊んでいるということはまったくない状況です。心配しているのは、伝建地区として建物などの形は残しているわけですが、今残している方、あるいは残していかなければならないと考えている方々は、かつて賀茂川や明神川で遊んだことがあるなど、小さいときに地域での生活の上で何らかのかたちで地域と密接に関

連した体験を持っている、地域に愛着のある方々といえます。この人達が、やはり何とか残しておかなければならない、次の世代に継いでいかなければならないと考えて維持しておられるわけです。しかし、今は子供達はまったく排除されています。こういうところで、将来形だけは何とか残せたとしても、これが本当に残せたといえるのかどうか。社家にしろ、明神川にしろ、生活と結びついて形があるときに、単に社家の家、あるいは土塀を残しても、それが本当に残したといえるのか疑問に思うわけです。あるいは、形も残せないのではないかという危惧をもっております。

川底が下がって起こっている問題に、遣水のことがあります。先ほども述べましたように、明神川から社家の庭園に引き入れられた水の流れて、また明神川に戻されます。明神川の川底が下がったために、遣水に水が流れなくなっています。二度ほど掘り下げたが、また水が来なくなつたとい

うところもあります。水があまり来なくなつたことと、一時の水の汚濁から、底をコンクリートで固め、また水の入り口を塞いでしまったところもあります。既に、遣水を潰してしまったところも二・三あるように聞いています。明神川の水量が少なくなつたことにも原因があります。遣水に水が流れているところでも、これが遣水にへド口が溜まりやすくなっていることの原因でもあります。半年に一度位はへド口をあげなければならぬいそうです。先ほどの西村家は公開していますから、遣水をきれいに流さなければならぬので工夫をしておられます。明神川からの水の取り入れ口で水をいったん止めて、そこからポンプで汲み上げておられます。水が汚れたしたら、すぐにポンプを止めて遣水の水路にへド口が堆積するのを防いでおられるとのことでした。電気代も無視できないので、普通の社家ではそこまでできないと思います。

明神川の美化保存会の清掃はもともとは必要として、また川をきれいにしようとして始まったわけですが、現状においては問題があり過ぎないかと思えます。公共下水道が上流域まで整備されましたので、昔ほど明神川にヘドロが堆積することとはなくなりました。これも清掃の影響もあると思うのですが、川底が凸凹になってしまったので、その凹み部分にたまるものです。もはや、藻ともにもヘドロと川底の土をあげてしまうのは、弊害の方が大きくなっています。遣水には今もヘドロが堆積しますが、これはまた別の方法を考えなければなりません。

七 おわりに

地域の中で物事を変えていくことはなかなか難しいです。上賀茂は歴史の古い場所ですから、上賀茂神社とともにここに住みつかれた社家の方、千数百年の伝統をもっておられます。同程度の古い歴史をもった農家の方、農家にはまた二つ

あり、大田神社の氏子の方とそうでない方。明治以降に上賀茂に居住された方は「入り込み人」と言われ、地域の人ではないのです。それから、当然もつと新しい方もおられる。お年の方は今でも社家の方には遠慮しておられるようです。そういう中で物事を変えていくのは難しく、急速な変化というのもやるべきではありません。一方で、明神川の改修というのもあまり遅くならないうちにやらなければなりません。これからも、あまり深く入り過ぎないようにしながら地域に役立つことをしたいし、地域の生活の記録もしていきたいと考えています。成果のなかなか出難いことをやっていますので、自分でもしんどいなど思いながら進めています。昨年の一一月には京都新聞が私のゼミの報告書を取上げてくれるなどで、周囲に励ましてもらいながら進めています。

質問 明神川美化保存会の浚渫はいつ頃から行

われているのでしょうか。いつ頃から、このよう
なやり方でやっているのでしょうか。

答 あまりひどい写真をお見せしたので、浚渫と
言われましたが、正式には清掃ですが、昭和四二
年に美化保存会が発足したときから、このような
方法で行ってきたと思います。初期は確かに
へドロもひどかったのだのであのようなことになっ
たのだと思います。だんだんとへドロや堆積物が
少なくなっても、やはり藻が生えることなどから
同様の方法が続いているのだと思います。私は藻
があってもいいじゃないかと申すのですが、藻が
ないのが昔の状況として、藻をあげるので、土も
あげてしまいます。

質問 清掃が始まるはるかまえの状況とすれば、
この状況というのは非常に穢れを嫌う、神道の考
え方でありはしないのであろうか、むしろ底が砂
利層であれば、穢れも自然にきれいになるように
昔に復元する。むしろ砂利層に戻してやる。石垣

の基礎の木が水中に出ているのであれば、砂利を
補給するようなことも考えられるのではないかと
思うのですが。復元の方法も色々あるのではな
いかと思います。

答 神道の考え方があるかについては、私は少々
考えすぎだと思います。自然に砂利もあつたと考
えた方が理解がしやすいです。砂利をひくとい
う話、あるいは砂利を補給するという話は、私もそ
れがまず良いのではと思つています。ただ、どこ
まで私に関与するべきかは難しい面が出てきま
す。地元でそういう話もしていますが、そうする
と市に言ってくれませんかという話がでてきま
す。それは私が言うことではなく、地元の方が力
を合わせて市に言われなければ効果はありません
よ。また、誰かが勝手にしてくれたでは今後の
ために良くありません。私は手助けするだけだと
言っております。ただ、この地域は先ほども言
いましたように、伝統あるところですから、誰がど

のように事を動かしていくかに難しいことがあります。

質問 神道が極度に穢れを嫌う。極端な穢れの除去ということになると、砂利層の浄化の力を機能として考えられるのかなと思いました。かつての状況を古老の方にも聞いてほしい、意見も調べてほしいなと思いました。

答 私も当面、おっしゃるように、まず砂利を入れたらどうかと考えています。これで様子をみってみる。その様子によつては、私はもつと本格的な改修が必要だと考えています。むしろ川底はコンクリートにしてしまう。その上に粘土層や砂利層を厚く作る方がいいのではと考えています。しかし、工事をしようとすれば大工事になります。また、道路側は市の管理範囲ですから市でやることになりましたが、社家などの民家側は個人のものですから市としては知りませんという形になります。伝建地区の保全ということも合わせて、市の

各担当部署とどういう風に交渉していくか、対応していくかが難しい点です。うまく地域のリーダーが育ってくれて、その方が進めないと難しいわけですが、そのリーダーをどのように育てていくのかも問題です。

参考文献

勝矢淳雄「賀茂別雷神社と明神川に関する歴史的考察」京都産業大学国土利用開発研究所紀要第

二一号、平成二二年三月

(平成二二年六月一〇日)